米国に於ける乳幼児オープン・アダプションの研究*,**

桐　野　由美子***
芝　野　松次郎****

はじめに

本稿では、アメリカで急激に進出してきたオープン・アダプションに焦点をあてて、以下の三点を論じながら、アメリカでの養子縁組の将来性を考察した。

1．アメリカの養子縁組の歴史的背景と、オープン・アダプションが全米で実施されるようになった理由
2．オープン・アダプションに関する理論的背景
3．これまでの調査結果の分析

但し、今回の考察では、対象を、産みの親や親戚と精神的結び付きができあがっていないと思われる、産みの親が生存中の、0才から2才の乳幼児養子縁組（アダプション）に限定した。

Ⅰ．定義

まず初めに、本稿でとりあげる養子縁組、クローズド・アダプション、オープン・アダプションといった言葉について定義したい。

養子縁組（アダプション）

養子縁組に関する州の法令は各州の相違はあるが、概して産みの親の親権を養親に譲渡する法令である。

州法にもとづく養子縁組機関は、法律上の養子縁組成立以前に、養親の選択と準備、養親と産み親間の連絡などを、それぞれ独自の方法でおこなっている。殆どの養子縁組の法律は、養子縁組布告の際に、養親と産み親が連絡しあうことを義務づけしていない。また、特定の裁判所命令がない場合は、親間の連絡には全く制限がない（Watson 1988）。

クローズド・アダプション（Closed Adoption）

クローズド・アダプションは従来の養子縁組を指し、養子の医療的背景、養親の外見的特徴、そして何故産み親が子供を養子に出す決心をしたかなどについての情報のみを養親に与えることになっている。元来、クローズド・アダプションの主旨は、養親と養子となった子供から干渉されないように産み親を保護すること、また、産み親から干渉されない様に養親と養子を守ることである。

したがって、クローズド・アダプションでは慣例的に、準備段階で、養親になろうとするカップルに対して、養子であるという真実告知をその子供にした後は、できるだけ、その子供が産みの子であるかのようにふるまうべきであると、カウンセリングしてきた（Silverman et al. 1988）。

オープン・アダプション（Open Adoption）

諸学者により定義に差は見られるが、概してオープン・アダプションは、「養親と産みの親との間に何らかのコミュニケーションがある養子縁

*キーワード：養子縁組、オープン・アダプション、クローズド・アダプション
**本稿は聖母女学院短期大学「研究紀要」第22集（1993年3月発行）と第25集（1996年3月発行）に桐野が英文で発表した論文を日訳し総括したものである。
***関西学院大学大学院博士課程後期課程社会学研究科社会福祉学専攻
****関西学院大学社会学部教授

組（Chapman et al. 1987）」としている。

オープン・アダプションは単なる一回きりの出来事ではなく、生涯に渡っての過程であるところに特徴がある。産みの親は、法律上では児童養育権を養親に譲渡するが、オープン・アダプションでは、産みの親は継続して子供とコミュニケーションをとる機会を保持する。つまり、オープン・アダプションの過程では、養親と産み親は相互間のコンタクトを継続的にとる選択をしてよい。そのコンタクトの程度は次に揚げる様に広範囲に渡る。

—養親選択の時に産みの親が参加し、ことによれば子供の誕生前に産みの親が養親に会う。
—産みの親の要望により、養子縁組機関を通して養親が写真をそえて子供の近況を産みの親に報告する。
—養子縁組機関を通して、あるいは直接に産み親と養親家庭が連絡を取り合う。
—産み親、養子、養親各自お互いの情報がほしい時にはいつでも、養子縁組機関から、それが得られる。

解放性の最も高いレベルでは、産み親家族と養親家族が継続した関係を持つ。連絡の頻度と程度、そしてどの様な関係を持つかは、三者（産み親、養親、養子）の要望とニーズに依る（Romph 1993, Cushman et al. 1993）。

オープン・アダプションのレベルは三当事者が決めるので、同じ形のオープン・アダプションが二つあることは在りえない。また、時と状況に合わせて、当時者が合意すれば、コンタクトのとり方を変えることができる。

Ⅱ．最近の統計

最近のデータによると、1990年には118,779人が養子となった。これは、1987年度からすると1%の増加であったが、同期間の人口増加率より少なかった（Child Welfare League of America 1993, Flango, V. & Flango, C. R. 1993）。

1990年度に成立した養子縁組の内、91.2%が国内のもので、その殆どは非血縁者間の養子縁組であった。非血縁者間の養子縁組の三分の二は公私の養子縁組機関によりなされ（agency adoption）、あとの三分の一は養子縁組専門の弁護士と医者によるもの（independent adoption）であった。非血縁者間養子の内、48.1%が二才以下の乳幼児養子であり、その数は24,589人であった。

現在、アメリカの人口（二億人）の内、およそ500万人が養子であると推定され、これは、全体の五分の一に相当するアメリカ人が何らかのかたちで養子縁組過程にかかわっていることを示す（Modell 1994）。また、Belbas（1987）は、1987年の時点で、80～90%の米国の養子縁組機関が、レベルの差はあれオープン・アダプションを実践していると推測した。

しかし、1975年以来アメリカ連邦政府には、全国の包括的養子縁組統計データシステムが欠けており、実態の把握は不充分で、児童福祉専門家たちから強く批判されている。

Ⅲ．歴史的概観

歴史的にみて、アメリカでの養子縁組は、第一に養親のニーズにかなうように実践されてきた（Valdez & McNamara 1994）。子供たちは、養親の相続人として、または、宗教上、あるいは政治的な理由から養子にされた。

しかし徐々に養子になる子供たち自身のニーズが考慮されだし、1920年代には全50州各々が児童保護法を制定した。1940年代から各州のソーシャルワーカーが立法者たちを説得し、養子と産みの親がお互いのことを知ることができないように養子縁組記録を封印する法を可決した（Siegel 1993）。以来何十年もの間、産みの親の未婚、養子の非嫡出、また、養親の不妊について知られないよう、秘密厳守と匿名性を強調するクローズド・アダプションが標準的な養子縁組の形態となった（Gritter 1989）。

しかし、1970年代後半から1980年代にかけて、オープン・アダプションが実践されだし、その実践率は今大幅に増してきている。この傾向の理由を大きく次の三つにまとめることができる。

1．産みの親を知る権利があると申し立てる成

人養子たちの産みの親との再会運動が起こったこと。
彼らは養親家族とあたかも遺伝子でつながっているかのようにして“偽り”の人生を送らねばならない苦痛を表現しだした(Caplan 1990)。
特に1950年代から1960年代にかけての公民権運動は、the Adoptees Liberty Movement Associationのような養子の権利を主張する団体に非常に大きな影響を与えた。現在のアメリカ社会では、家系や先祖に対する関心が高まっているので、自己のアイデンティティーを追及するためにルーツ、血縁を探し求めることは一般に正常で健全であるとみなされている。
徐々に州法は、成人した養子が産みの親を探したいと願い出る際に養子縁組の記録を開示する方向に動いている。1990年の時点では、全50州の内39州が養子縁組の情報を開示する許可を出している。また、22の州では養子と産み親相互間の同意書を提出するか、あるいは両者からの問い合わせが一致した場合には記録を開けており、17州では素性、生い立ちのみの情報を提供している(Berry 1991)。

2. 生まれてくる子供を養子にしてよいという若い母親の数が低減したこと。これには、社会が独身の親と中絶に対し、寛容になりだしているという事実が反映されている(Demick 1993)。
3. 養子候補の乳幼児が減少したため、養親は、産み親が養親を選択する権利や、親権終了後に養親家族と連絡をとる権利をもっと考慮し始めた。クローズド・アダプションを経験した産み親たちは、ソーシャルワーカーが強く主張していたのとは裏腹に、養子にやった子供達のことを忘れなかった。彼等はいつも、子供が無事に生きているのだろうか、自分が養子だと知っているのだろうか、と案じた(Demick & Wapner 1988)。

このように、法律や養子縁組機関が促したからではなく、縁組当時者たちが自ら進んでオープン・アダプションへの第一歩を踏みだした。

また、今世紀中頃までは、幸福な結婚生活を営んでいる養親夫妻が、養子にとって理想的家族モデルとしてかかげられた。しかし今では、他の家族と同様に多数の問題をかかえ、養親家族も完璧とはいえなくなっている。

Agency adoption(機関による養子縁組)、independent adoption(弁護士や医師による養子縁組)は、両者とも変化してきた。現在では殆どの機関が養親と産みの親にオープン・アダプションをオプションとして提供し始めた。従来の伝統的な公立養子縁組機関も、オープン・アダプションについて懸念が全くないとは言えないにせよ、時代に遅れず他と競争できるようにオープン・アダプションを提供し始めている。

州立養子縁組機関、キリスト教会財団、あるいはアメリカ児童福祉同盟のような包括的組織が一般に養子縁組の基準を示すのであるが、その中でも代表的な、アメリカ児童福祉同盟(Child Welfare League of America)が1980年半ばからオープン・アダプションの標準化に力を入れている(桐野 1993、1996、1997 in press)。

Ⅳ. オープン・アダプションに関する理論

社会福祉学者たちは、オープン・アダプションの多様な面をさまざまな理論を用いて理解しようとしてきた。しかし現在、オープン・アダプションの包括的な定理論はない。

1950年代から1980年代にかけて議論されたクローズド・アダプション対オープン・アダプションに関する主な理論には、Bolby(1969)の愛情/愛着理論(attachment theory)、Lerner(1985)の最適適応理論(goodness of fit theory)、Brodzinsky et al.(1984)のcognitive-developmental theory、Minuchin(1974)の家族システム理論(family systems theory)、Kirk(1964)の養子縁組における親戚関係理論(adoptive kinship theory)、Kraft et al.(1985)の伝統的精神分析理論(traditional psychoanalytic theory)、Werner(1957), Demick & Wapner(1988)の有機的発達理論(organismic - develpmental theory)などがある。

Demick と Wapner を除いた上記すべての研究者が、一般的にオープン・アダプションの実践には慎重を要すると警告した。尚、上記の理論の内、精神分析理論が伝統的なクローズド・アダプションの核心となっている。

Organizational-Relational Theory（組織相関理論）

組織相関理論は最近 Silverstein と Demick により提案された理論である（1994）。この理論は有機的発達理論（Werner 1957, Demick & Wapner 1988）の構造的な見地と、自我関係理論（self-in-relation theory）（Miller 1976）の力動的な見地を用いている。

伝統的精神分析理論では、「健全な心理的発育は本質的に、自我が他者から離別していくプロセスである」とする概念に基づくので、伝統的精神分析理論からみれば、産みの親が深く悲しんで養子にだした子供が忘れられない場合や、養子が成長過程において産みの親の情報を要望したり、産みの親と連絡をとりたい場合、あるいは、養親が自分で産めない子供のことや、養子の産みの親のことに思いをよせる場合には、養子縁組に関わる三者（産み親、養親と養子）は皆、病的であるとみなされる（Kraft et al. 1985）。

それと対象的に、自我関係理論では、人と人との関係を維持することを重要視する（Miller 1976）。他者のニーズと実在を認識し、またそれに敏感に反応してゆく自己意識を保持するという作業は、複雑であるが正当である事をはっきりとこの理論で表現している。

自我関係理論の強力な基盤となっている感情移入（共感）によって、養子縁組三者は、相互関係にあるストレス、苦痛、また複雑さに耐えることができる、と Silverstein と Demick（1994）は主張する。彼らは次の様に述べている。

> …喪失したもの、それは産みの親が親になる機会、養親が妊娠そして出産し、血の繋がった子孫を育てる機会、また、養子が血縁者のもとで成長する機会である。しかし、養子縁組当事者全員が、生涯続く感情の嵐に耐えるためには相互の尊敬と援助が必要であり、それがある限り、喪失したものを否定したりする必要はない。・・・オープン・アダプションでは、産みの親、養子、養親がそれぞれに抱えている複雑な感情が一回きりのものではなく、縁組が形式上まとまった後にも存続することを認め、（クローズド・アダプションの場合にみられるように）それぞれ孤立して悩む必要はない。

力学に焦点をおく有機的発達理論の主要概念は自己と対象の識別（self-object differetiation）である。この理論に基づき、Demick と Wapner は次の様に養子縁組三者関係（adoption triangle）を四つに分類している。

1. 分化（differentiated）：養子は産まれた家族から完全に離別しているのが特徴で、これは伝統的なクローズド・アダプションにあたる。養子縁組三者全員が意識的に、あるいは無意識にその子供が養子であることを否定している。
2. 分化と隔離（differntiated and isolated）：養親が養子をかくまい、養子が産みの親について情報を得ないよう、また、養子であるという恥辱を味わずにすむようにしている。
3. 分化と葛藤（differentiated and in conflict）：養子は産みの親であれば違った待遇を自分にしてくれると空想する。或いは、成人になると養親家族を去り産み親家族を探すと脅す。
4. 分化と統合（differentiated and integrated）：オープン・アダプションはこの種類にあたり、養子は自分の内にある二元的なアイデンティティーのさまざまな点を統合し調和させ、アイデンティティーと自尊心に関する潜在的問題をも低減する事ができる。同様に養親も、養子のアイデンティティーの様々な点を吸収し、何か問題が起こる度に、「養子の素性の悪い血」をとがめることをしない。

Silverstein と Demick は、こうした有機的発

達理論と自我関係アプローチ（self-in-relation approaches）を統合することによって、アダプションにまつわる問題の解決にとって非常に有益な示唆が得られるとしている。

V．最近の実証的研究調査 (Empirical Research)

オープン・アダプションの調査が近年多く発表されているが、調査のサンプルは殆ど養親と産みの親である。クローズド・アダプションとオープン・アダプションの養子を比較する追跡調査（longitudinal research）はまだない。オープン・アダプションの養子が調査対象にできる程成長していないからである。本稿では、産みの親、養親、そしてオープン・アダプションに関する一般の人たちの意見についての最新研究調査を概観する。

1．養親の研究調査

養親のオープン・アダプションに関する態度／反応：

1989年にSiegel（1993）は、アメリカ南東部のかなり広い領域にかけて、1988年ないしは1989年に乳幼児を養子に迎えた21組の夫婦にインタビューを行なった。研究目的は、オープン・アダプションが養親夫婦と乳幼児養子に与えた当初の効果を養親達が如何に認識したかを調査することであった。

対象者のオープン・アダプションのタイプと程度はさまざまであった。養子縁組前の産み親と養親間のコンタクトが全く無しの最低限のレベルから、養子縁組機関を通して匿名で手紙交換などを行なう制限つきのレベル、また、最高レベルでは、子供の誕生前から誕生後も、毎月養親が産みの親に会うケースもあった。

調査結果によると、養子への長期的効果について不安を持つ者もいくらか存在したが、オープン・アダプションを選択した事を後悔する者は一人もいなかった。また、2、3人がオープン・アダプションのプロセスで苦痛を経験したが、オープン・アダプション自体に間違いがあるとは誰一人として考えなかった。オープン・アダプションについてどう感じるかと問うと、「とても快適だ。」「間違い無かった」などと答えた。また、「好きです。本当にいいですよ。」「（選択したオープン・アダプションの）程度が丁度良かった。」「（産み親との）コンタクトを維持することに全く問題無し」などの意見も付け加えられた。

Siegelは、結論として、この研究調査は、「オープン・アダプションはとんでもない誤りだ（Kraft et al. 1985）」とする断言への反証の始まりであると述べた。

養親のオープン対クローズド・アダプションへの適応：

Demick（1993）は、小規模な実施調査をし、データ分析に組織相関理論（organizational-relational theory）を使用した。当時クローズド・アダプションを経験中の15組の養親夫婦と、なんらかのオープン・アダプションの形式を経験中の15組の養親夫婦を対象に、質問紙調査とインタビューを実施した。対象者すべてが、乳幼児を養子にしてからの期間が、調査開始時点で二年以内であった。

調査の目的は、伝統的クローズド・アダプション実践中の夫婦とオープン・アダプション実践中の夫婦の経験の類似点及び相違点を評価することであった。生活面での満足感、ストレスの認識度、親子としての愛情に関する認識度についての大きな相違点は二グループ間にみられなかった。しかし、付加的分析では、次に揚げる相違点が出た。オープン・アダプション実践者に比べ、クローズド・アダプション実践者は、自分の乳幼児養子の愛着に関して、より不安に思い、その養子は手がかかり、わずらわしい、とより強く感じていた。

Demickは結論として、この調査では、クローズド・アダプションと比べてオープン・アダプションの方がperson-in-environment system（環境における人のシステム）としてより高度なものであるという結果は出なかったと述べた。しかし一方で、オープン・アダプションの実践により、養子が今後成長した時に、クローズド・アダプションよりよい効果が現われるのかもしれないと推測した。

オープン・アダプションのレベルの変動：

Grotevantら（1994）の研究調査では、家族システム理論（family-system theory）が用いられた。家族システム理論では、家族間の機能を理解する上で、家族の全メンバーを考慮する事が重要である。したがって、養親家族を理解するには、養子の産みの親家族を養親家族システムの一部としてみる事が不可欠である（DemickとWapner 1988）。

この調査研究の目的は、オープン・アダプションの開放の程度が家族システムとどう関係するかを探究する事にあった。

調査の対象者は、最低一人の乳幼児を養子縁組機関を通して養子として迎えた190組の養親家族であり、アメリカ全50州の内の15州にある35の養子縁組機関によって抽出された。対象家族は開放性の度合によって三つに分類された：62家族は限定開示型養子縁組（cofidential）、69家族は中介開示型養子縁組（mediated）、そして59家族は完全開示型養子縁組（fully disclosed）であった：限定開示型養子縁組では、養親家族と産み親家族間で最低限度の情報が交換され、典型的パターンとしては、その情報交換は、養子縁組成立時点あるいはその直後に停止する。中介開示型養子縁組では、養子縁組機関の職員を仲介にして匿名で情報を分かち合う。そして、完全開示型養子縁組では二組の家族が直接に連絡を取り合い、身元証明も含めた情報交換をする。

この調査では家庭訪問をし、3〜4時間にわたるインタビューを実施した。結果の考察に用いられた10の変数を次に揚げる。

—養子縁組についての養子とのコミュニケーション
—養子への感情移入
—産みの親への感情移入
—自分達を養親家族として認める程度
—養子の素性に関する関心
—産み親が養親家族の生活との関わりあいを調整する能力に関する満足度
—産み親が養子を取り戻すかもしれないという恐れの程度
—親子関係の永遠性に対して養親が感じること
—親としての役割と責任に関しての養親の考え
—養子縁組に関する養親の考え方の一貫性

インタビューの分析結果は、オープン・アダプションの関放性の度合による三つの形態では、それぞれでの養親家族の力量に類似点と相違点が見られた。類似点としては、殆どの養親が自分の役目について比較的確信を持っており、養子との関係の恒久性に関する心配はあまりなかったことである。また、殆どの養親は、産み親が養親家族の生活に関与することを統制できると感じており、満足を示していた。

限定開示型養子縁組と比較して、他のすべての形態のオープン・アダプションにみられた特徴を次に揚げる。

- 子供が養子である事実をはっきりと自認している。
- 養子と産みの親の立場を理解している。
- 将来を考えながら、子供との恒久的関係を強く感じる。
- 産み親が子供を取り返しはしないかと、あまり恐れていない。

研究者たちは169名の産み親もインタビューしているが、そのデータ分析は現在進行中である。

大規模な追跡調査（longitudinal research）：

Berry（1991、1993）は比較的に大きなサンプルを用いて調査をした。サンプルはカリフォルニア州で1988年から1989年の間に1396名の養子を迎えた1268名の養親である。この研究調査はカリフォルニア州における各種の養子縁組（エイジェンシー・アダプション、インディペンデント・アダプション、国際養子縁組等）に関する一連の研究の第一弾である。この研究グループは、今後18年間に渡り、養子と養親家庭とに連絡をとり、彼らの成長ぶりを調査することになっている。この第一回目の調査では記述的データが中心で、養親が養子縁組についてどう考えているのかに焦点を当てている。質問紙形式で、養子と家族について多くの質問をした。

調査対象の養子縁組の内、53%が公立のエイジェンシー・アダプション、12%が私立のエイジェンシー・アダプション、35%がインディペンデント・アダプションであった。大多数の縁組でさまざまな形態のオープン・アダプションが提供

されていた。その中でも、インディペンデント・アダプションの内の四分の三が産み親との接触を許していた。

なお、インディペンデント・アダプションとは、公私立のエイジェンシーを通さず、弁護士や医者により行なわれる養子縁組を指し、家庭調査などのソーシャル・サービスを前もって受けずに実践されるので、比較的短時間で縁組が成立する。調査時において、半数以上のインディペンデント・アダプションの養親が養子の誕生に立ち会っており、三分の二以上が産み親と継続的に連絡をとるつもりにしていた。継続的に連絡をとっているケースは、エイジェンシー・アダプションではやや少なく、三分の二以下であった。

調査対象の1307名の養子の内の69%が養子縁組当時一才未満であった。乳幼児を養子に迎えた養親の半数が縁組以前に産み親に会っており、一才以上で養子を迎えた親の12%が産みの親と会っていた。全体的にみると、乳幼児を養子にした養親の76%が縁組前後に産み親と対面し、5才以上の子供を養子に迎えた養親の45%が産みの親と対面したという結果が出た。

また、次の四つの条件が満たされている場合に、養親はオープン・アダプションに比較的よく満足していることがわかった。

- 養子が過去に虐待されていなかった場合
- 産みの親が比較的高い教育を受けていた場合
- 養親と産み親間のコンタクトが直接的になされている場合
- 養子縁組前に養親が産み親と話し合っていた場合

Berry は結論として、乳幼児養子縁組の大部分がオープン・アダプションの形式をとっており、養親達は養子縁組前に産み親とコンタクトを持つことについて「慎重ながらも」快く思っている、そして将来オープン・アダプションの選択率が低下することは考えられないと述べている。

2. 産みの親に関する研究調査

アメリカの十代の女子の内約100万人が毎年妊娠するが、その殆ど半分は出産に至っていない。19才以下の女子の出産は過去数年に渡り毎年増加している。1986年には472,081人の子どもを19才以下の女子が出産しているが、1990年には533,483人に増えた。十代の母親が産んだ子どもは、1990年には、全出産児の13%を占めている。これは、彼女たちが一日に1,464人、あるいは一時間に61人の子供を出産したことを示す（アメリカ児童福祉同盟：Child welfare League of America 1993)。しかし最近では、若い母親が自分の乳幼児を養子に出す選択をすることが少なくなっており、若い母親の約5%が養子縁組を選択していると推測されている（Cushman 1993)。

青年期の母親の体験：

オープン・アダプションを経験する産みの親の調査はあまりなされていない。しかし、Cushman ら（1993）は、自分の乳幼児を養子に出した215人の若い母親（その内36%が18才未満で64%が18才から21才）を対象に調査研究を実施した。養子縁組は、全国13州の養子縁組機関と母子寮を通して行なわれた。最初のインタビュー時の彼女達の平均年齢は17.9才であり、全員が養子縁組成立前は母子寮に住んでいた。第二回目のインタビューは、養子縁組の後でおこなわれた。

養子縁組の開放性に関しては、三分の二の母親が自分の子供の養親選びを手伝った。彼女たちの71%が、養親に会ったと答えている。養子縁組機関が、あらかじめ母親の好みに合わせて選択した数組の人物の中から一つを母親が選ぶという形式が多かった。一方、母親がどの養親候補者を選択するかの最終決定をする前に候補者に会うというケースは少なかった。母親たちの54%が縁組後の養子家族から子供の写真ないしは子供の様子についての手紙を受け取っており、59%が、子供がいつも持っていられるようなプレゼントを子供に与えていた。インタビュー時には、母親の7%のみが、養親家族に直接連絡できると答え、71%は、機関を通してなら連絡できると述べた。調査結果は、オープン・アダプションの方向に動く傾向を示している。

また調査結果から、新生児を産みの親から直接（機関などの介入無しで）養親家族に渡す方が、産み親にポジティブな成果をもたらすことがわかった。故に Cushman らは、産み親が養親家族との

コンタクトを継続する場合には、新生児を誕生直後に里親家庭で保護するのはどうしても必要でない限り、避けるべきであると提案した。

3．産みの親と養親に関する調査研究

16組の養親と産み親の満足度：

Gross（1993）は16対の養親夫婦と16人の産み親を対象に小規模な研究をした。被験者は、1989年から1991年の間にアメリカ中西部の、私立養子縁組機関によるオープン・アダプションを経験していた。各被験者に綿密なインタビューを実行し、オープン・アダプションの過程に関する満足度を考察した。全養親家族が産み親家族と対面し、しかも過半数が養子縁組後、数回会っていた。養親家族の25％は、接触を活発におこなっていた。例えば、産みの親がベビーシッターをしたり、親族の親睦会にも参加した。

調査結果によると84％の養親が産み親との取り決めに満足しており、94％の産み親が養親と取り決めたコンタクトの程度と、養親との関係に満足していた。

この研究調査は、オープン・アダプションに対しての双方の満足度は高いレベルにあり、オープン・アダプションはよい効果をあげていることを立証しているとGrossは結論を出している。

乳幼児オープン・アダプションにおける協力と満足度：

Etter（1993）による研究は、前述のGross（1993）と比べ、比較的大きいサンプルを用いており、56対の養親と産み親を調査した。56組の養子縁組は、1984年から1987年の間に法的に完了していた。全ケースがある程度のオープン・アダプションを経験しており、文通か訪問によるコンタクトが継続していた。このアンケート調査では、産み親と養親が互いに協力しあう能力に焦点が置かれた。すべてのケースが契約書を取り交わしており、関係者の連絡方法に関する要望などの詳細が記されていた。調査目的は、親どうしが契約書に従って協力し合っているか、また、彼らが相互の連絡について肯定的に考えているか、を考察する事であった。なお、クローズド・アダプションを統制群としていないために、この研究には限界がある。

契約書に従って、98.2％の養親が、そして100％の産み親が訪問の約束を守った。満足度に関しては、94％の産み親がオープン・アダプションの過程に満足しており、78.2％の養親もオープン・アダプション過程に満足していた。

Etterは、親の間で養子縁組決定前に交わされた契約書が次に揚げる項目をふくんでいた場合に満足がえられたとしている。

- 解放性の程度の選択
- オープン・アダプションの為の徹底的な準備過程について
- 契約を正式な書類として整える

Etterは、親がオープン・アダプションの際に養子縁組機関を利用する事を提案している。なぜならば、インディペンデント・アダプションと異なり養子縁組機関は、養子が成人するまで、指導を提供し、安全を確保することができるからである。

Etterは、養親のみを対象とする調査と比較して、養親と産み親の両方を対象とする調査は難しいが、親の相互作用に関する調査研究はさらに大きな規模で実施せねばならないとしている。

4．一般社会のオープン・アダプションに対する態度の調査

オープン・アダプションに関する大規模な世論調査：

Romph（1993）のオープン・アダプションに関する世論調査のほかには、その類を見いだせなかった。Romphの養子縁組に関する調査は初めての大規模な世論調査で、養子縁組の成り行きを予測し、養子縁組政策がどのようにみられているかを評価するのが目的であった。

1991年に、640名の大人を無作為に電話し質問をするという形式でデータを取った。殆どの成人がオープン・アダプションを好ましく思っているという調査結果が得られた。52％の回答者が、強く、ないしはある程度オープン・アダプションをよいと認めていた。また、20％が、オープン・アダプションは特定状況ではオプションとして提供

されるべきだとしている。そして、ほぼ四分の三の回答者がオープン・アダプションについて好意的に考えていた。

また、86%の回答者が、養子は自分の産みの親を探したがっていると考えていた。Romph はこれは、社会がオープン・アダプションを承認する方向にあることを示す証拠であるとしている。一般社会は養子縁組の当時者がお互いに連絡し合う必要性を、理解していることから、養子縁組機関がクローズド・アダプションからオープン・アダプションへと移行することに対して反対は余りないだろう、と Romph は述べている。

調査結果の意味する事：

このように最近の調査結果から、養親と産み親は、乳幼児オープン・アダプションについて、開放性の度合に関わらず、好意的に考えていることがわかる。また、アメリカ社会も概して、オープン・アダプションに対して好意的であることがわかった。

また、この二、三年の間に、従来のクローズド・アダプションを支持する調査を見いだせなかったことも付け加えておきたい。もはや養子縁組の有力な方法として、オープン・アダプションを選択してもよいところまできているのではなかろうか。

VI. 結び

アメリカの養子縁組は急速に変化してきた。今では、多くの産み親と養親がオープン・アダプションを好む。それ故に多くのエイジェンシーが、従来のクローズド・アダプションに不満を抱く親のニーズを満たすために、親間のコミュニケーションを重視するオープン・アダプションを採用するようになってきた。また、一般社会もオープン・アダプションが養子縁組当時者の利益になると、認め始めている。

養子縁組の当時者自身がオープン・アダプションを率先して実施し始めたので、養子縁組専門家たちの方が遅れをとってしまい、オープン・アダプションの成果に関するデータがまだ整っていない。オープン・アダプションの真の評価をするには、クローズド・アダプションを経験した養子と、オープン・アダプションを経験している養子たちを比較する追跡調査（longitudinal studies）をする必要がある。しかし、まだオープン・アダプションの養子たちが調査の対象になる年齢には達していないので、しばし待たねばならないであろう。

当面は、ケース・バイ・ケースで、各々の親が一番安心できるタイプのアダプションを選択することが賢明であろう。

参考文献

Belbas, N. F (1987). "Staying in Touch: Empathy in Open Adoption." *Smith College in Social Work,* 57 (3) : 184–198.

Berry, M. (1991). "The Practice of Open Adoption: Findings from a Study of 1396 Adoptive Families." *Children and Youth Services Review,* 13: 379–395.

Berry, M. (1993). "Adoptive Parents' Perception of, and Comfort with, Open Adoption." *Child Welfare,* 72:231–253.

Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss Vol. I: Attachment.* New York: Basic Books.

Brodzinsky, D, M., Singer, L. M.; & Braff, A. M. (1984). "Children's Understanding of Adoption." *Child Development, 55: 869–878.*

Caplan, L. (1990). *An Open Adoption.* New York: Farrar, Straus, & Giroux.

Chapman, C., Dorner, R., Silber, K., & Winterberg, T. S. (1987). "Meeting the Needs of the Adoption Triangle Through Open Adoption: The Adoptive Parent." *Child and Adolescent social Work,* 4 (1) : 3–12.

Child Welfare League of America. (1993). *The Child Welfare Stat Book 1993* : Washington D. C.: Child Welfare League of America.

Cushman, L. F., Kalmuss, D.; & Namerow, B, (1993). "Placing an Infant for Adoption: The Experiences of Young Birthmothers." *Social Work,* 38 (3) : 264–272.

Demick, J., & Wapner, S. (1988). "0pen and Closed Adoption: A Developmental Conceptualization." *Family Process,* 27: 229–249.

Demick, J. (1993). "Adaptation of Marital Couples to Open Versus Closed Adoption: A Preliminary Investigation." *Parental Development.* Ed. Demick, J., Bursik, K. & DiBiase, R. New Jersey:

Lawrence Erlbaum Associates: 175–201.

Etter, J. (1993). "Levels of Cooperation and Satisfaction in 56 Open Adoptions." *Child Welfare,* 72: 257–267.

Flango, V., & flango, C. R (1991). "Adoption statistics by State." *Child Welfare,* 72 (3) : 311–319.

Gritter, J. L. (1989). *Adoption Withoyt Fear.* San Antonio: Corona Publishing Company.

Gross, H. E. (1993). "Open Adoption: A Research–Based Literature Review and New Data." *Child Welfare,* 72 (3) : 269–283.

Grotevant, H. D., McRoy, R. G., Elde, C. L.; & Fravel, D. L. (1994). "Adoptive Family System Dynamics: Variations by Level of Openness in the Adoption." *Family Process,* 33: 125–146.

Kirino, Y. (1993). "Moving Toward Open Adoption of Infants in the United States." *Bulletin of Seibo Jogakuin Junior College,* 22: 86–93.

Kirino, Y. (1996). "Has Open Adoption Become Standard Practice in the United states?" *Bulletin of Seibo Jogakuin Junior College,* 25: 64–76.

Kirino, Y. (1997 in press). "Update on Infant Open Adoption Movement in the United States." *Bulletin of Seibo Jogakuin Junior College,* 26.

Kirk, H. D. (1964). *Shared Fate: A Theory of Adoption and Mental Health.* New York: The Free Press of Glencoe.

Kraft, A., Palombo, J., woods, P., Mitchell, D,; & Schmidt, A. (1985). "Some Theoretical Considerations on Confidential Adoptions, Part II: The Adoptive Parent." *Human Science Press* : 69–81.

Lerner, R. (1985). *On the Origins of Human Plasticity.* Cambridge, England: Cambridge University Press.

Miller, J. B. (1976). *Toward a New Psychology of Women.* Boston: Beacon Press.

Minuchin, S. (1974). *Families & Family Therapy.* Cambridge: Harvard University Press.

Modell, J. S. (1994). *Kinship with Strangers: Adoption and Interpretations of Kinship in American Culture.* Berkeley: University of California Press.

Romph, E. L. (1993). "Open Adoption: What Does the 'Average Person' Think?" *Child Welfare,* 72 (3) : 219–230.

Siegel, D. H (1993). "Open Adoption of Infants: Adoptive Parents' Perceptions of Advantages and Disadvantages." *Social Work,* 38 (1) : 15–23.

Silverman, P. R. Campbell, L., & Patte, P., & Style, C. B. (1988). "Reunion between Adoptees and Birth Parents: The Birth Parents' Experience." *Social Work,* 33 (6) : 523–528.

Silverstein, D. R., & Demick, J. D (1994). "Toward an Organizational–Relational Model of Open Adoption." *Family Process,* 33: 111–124.

Valdez, G. M., & McNamara, J. R. (1994). "Matching to Prevent Adoption Disruption." *Child Adolescent Social Work Journal,* 11 (5) : 391–403.

Watson, K. W. (1988). "The Case for Adoption." *Public Welfare,* 46 (4) : 24–28.

Werner, H. (1957). *Comparative Psychology of Mental Development.* New York: International Universities Press.

Open Adoption of Infants in the United States

ABSTRACT

For the past couple of decades there has been dramatic change in infant adoptions in the United States. It is widely known that currently, more and more birthparents and adoptive parents prefer open adoption to better meet their needs and also for the best interest of the child. Thus, most American adoption agencies, both public and private, now offer open adoption as an option.

This paper first reviews historical background as well as adoption theories in order to explore the open adoption movement in the States. Secondly it examines a number of recent empirical research, and discusses some possible directions for the future in the field of infant adoption in the States.

Key Words : adoption, open adoption, closed adoption